

『沈香屑 第二炉香』を読む ——文明、人種の問題を中心に——

河尻和也

はじめに

『沈香屑 第二炉香』（『沈香屑 第二香炉』、以下『第二炉香』とする）は、張愛玲（1920－1995）が1943年に上海で、雑誌『紫羅蘭』第5期に発表した中篇小説である。張愛玲は、1939年にロンドン大学に合格する。しかし、戦争のために渡欧を断念することになった彼女は、同年、香港大学に入学する。張愛玲は香港で3年間をすごす中で、香港の陥落を経験した。休戦後、香港大学堂臨時医院で臨時看護婦をして後、42年上海に戻る。同年、上海の聖ジョン大学に入学するが、「良い教授がない」¹とその年に中退し、以後、職業作家としての道を歩む。

これまでに『第二炉香』は、ヒロインのセクシュアリティをめぐる批評が多くなされている。²しかし、当時の香港の具体的背景をもととした研究は行われていない。³そのため、私は本論文において、張愛玲の中篇小説『第二炉香』を、小説の舞台である当時の香港の、人種間の関係を考察し、その中から作中に見られる文明、人種の問題を考えてゆきたい。そして、最後に本稿の考察から、張愛玲が自身の思想背景として述べる〈荒涼観〉⁴の一部を読み解いてゆく。

1. 植民地香港と、『第二炉香』に登場する人物

ここでは、『第二炉香』における当時の香港の様子、そして小説に登場する主要登場人物たちの国籍や住居の場所を取り上げ、彼らが当時の香港において、いかなる立場に位置付けられているのかを考察する。

『第二炉香』の舞台となる香港は、1840年アヘン戦争の後、翌41年にイギリス海軍が香港島に上陸・占領、1942年には南京条約により香港島の割譲が決定された。また、1860年には九龍とストーン・カッター島が割譲され、1898年には新海、威海衛が租借された。⁵

『第二炉香』は、入れ子構造の物語となっている。乾隆帝への上奏文を読

んでいる「私」のいる外枠物語。そしてアイルランド人の女の子クレメンティが「私」に話した、内枠物語における「香港の社交界の中で、ひどく悪く話されている物語」⁶である。クレメンティンから内枠物語を聞き、沈香の香りとして、⁷物語を読者に提示する「私」は、「中国人の女の子の多くは、そんな事⁸とっくに知っているわよ（中略）私達の小説は、あなた達の小説とは違って（性描写が）率直なのよ」（p89）と述べていることから、中国人であることがわかる。

内枠物語の、およそその時代設定は、主人公のイギリス人ロジャーが、車に乗っている（p91）ことから、早くとも1910年10月以降のことと考えられる。⁹外枠物語の時代設定については、具体的な言及は存在しない。しかし、『第二炉香』の発表が、1943年であるため、1910年2月以降～1940年代前半に、外枠物語の「私」が聞いた物語であると予測される。

当時の香港（内枠物語での）は、大村真紀が『香港セピア物語』において述べるように、「…ポルトガル人街さえあった。また、ターバンを巻いたインド人警察官の姿も多く見られ、ビジネスの世界で成功しているインド人もたくさんいた。そのほかにもフランス系の銀行、ドイツ系やアメリカ系の商社、イタリア人宣教師がつくった学校もあったし、オーストラリア人、マレー人、もちろん日本人も生活していた」、¹⁰といった異人種の混合地帯である。その中でも最も優位にいた人種は、当然、香港を支配していたイギリス人である。大村は、『香港セピア物語』で当時のイギリス人を「開拓期とはくらべものにならないほど組織化された社会となった香港では、（中略）総督の権力はゆるぎないものとなり、イギリス人たちの優位は絶対的なものとなっていく」¹¹と、述べている。

イギリス人は、香港を植民地とした当初から、銅鑼湾から西榮盤のあたりまでの、海岸沿いの約4.8キロメートルの区間に街を作り、そのエリアを「クイーンズタウン」と呼んだ。しかし、1843年には正式に「ヴィクトリア＝維多利亞」と命名される。¹²このような植民地化した他国の領土を、自国に馴染み深い空間へと変化させる行為とは、葉倩璋が述べるように、植民地の「象徴的形態」であるといえる。¹³

植民地空間について葉倩璋は、「異なる文化がお互いに出合い、ぶつかり、絡み合う社会空間」であり、「異文化同士の接触が起こる <コンタクト・ゾーン>」、「そして地理的かつ歴史的に相異なる人々が接触する空間で、そこには弾圧と圧倒的な不平等と対立とが含まれ、複雑な関係が断続的に存在す

る」¹⁴と、述べる。植民地香港においても、人種間の差別、階級における住み分けは存在する。例えば、最大の権威を有していたイギリス人は、ハッピー・ヴァレー一帯に住み、¹⁵中国人は、植民地以来、その“不潔”のゆえをもって、山上や中腹の居住地には一切居住を許されず、劣悪な衛生環境のもとに密集して隔離居住の状態にあり、ヴィクトリア・ピーク周辺の高級住宅地には、第二次世界大戦で日本が占領するまで、住むことが許されなかったのである。¹⁶

イギリス帝国主義が、アジア・アフリカなどの植民地経営に乗り出す際、キリスト教の伝播を伴っていた。その目的について井野瀬は次のように述べる。

ヴィクトリア朝的博愛のシンボル、キリスト教の海外伝道にたいして熱狂的な支援が渦巻いていた時代である。アフリカ人にキリスト教を広め、「野蛮」な彼らの風習を改めさせて「文明化」しようとする…¹⁷

中国においても、キリスト教の布教は行われ、それに反対するために 19 世紀末、義和団事件が勃発する。イギリスのキリスト教布教が、中国の文明化を唯一の目的であるとは考えないとしても、先にも挙げたように中国人を“不潔”であると隔離することから、自国イギリスの文化を先進的で「文明的」、中国の文化を遅れた「野蛮」であると考えていた事は理解されよう。¹⁸

植民地においては、イギリス人間、白人間、インド人、混血児などの間にも、階級の差が存在する。例えばイギリス人間の階級の差についていうなら（ここで取り上げる事象は香港についての事柄ではないが）、モームの短篇小説『雨』などでも、植民地へと赴く舟の中で、マクフェイル夫人は、「そりゃ、あんな喫煙室のがさつな連中と一緒にならなくちゃいけないんじゃ、デイヴィッドソンさんご夫婦（宣教師夫婦一河尻注）だって相当やりきれないと思うわ」¹⁹と語っている。このような描写からも、イギリス人の中産階級が、自国の下層階級を、階級の違い（文化的、非文化的）によって区別していた事は理解されるであろう。²⁰

当時、植民地に向かったイギリス人の妻たちは、メムサーヒブ（memsahib）と呼ばれていた。彼女たちは、イギリス人男性によって「ヴィクトリア朝社会の空気が、そっくりそのまま、海を越えて、アジアやアフリカの植民地にも移植され」、²¹「現地人社会とはまったく隔絶した白人社会に閉じこもり、あくまで本国と同じ生活様式を維持しよう」²²とする立場に置かれていた。当時イギリス人の植民者の中では、現地人を内縁の妻として娶ることが非公

式な習慣となっていた。そのためイギリス人の妻たちは、夫の現地人女性との肉体関係を危惧して、現地人男性を使用人として雇う事を望んだ。しかし、イギリス人男性は白人女性が現地人男性に襲われる心配から、現地人男性を使用人として雇う事を嫌がった。このように彼女らは、イギリス植民地において、白人社会と現地人社会との境界線そのものだと考えられていたのである。²³

ロシア革命の後で上海、香港へと落ち延びた白系ロシア人などは、「舟の守衛、売春婦、ダンスの教師、写真家、調教師」²⁴などになり、苦しい生活をしていた。上海においては、イギリス人と白系ロシア人との結婚は、ほとんど混血児との結婚と同程度に不面目な行為とみなされており、²⁵ 20世紀初頭の香港における白系ロシア人について、イギリス人ジョン・モリスは、「ロシアは香港ではいつも怪しまれてきた」²⁶と述べている。

また、インド人は兵士、警察官、船の護衛など、さまざまな職業についていたが、彼らは「金持ちや有名人でなければ、イギリス人と中国人双方からのさげすみに耐えなければ」²⁷ならなかった。

香港の混血児について、張愛玲は、第一次世界大戦の前の香港を描いた中篇『第一炉香』の混血児、吉捷に次のように語らせる。

そうよ！私自身も雑種なの。私もその苦しみを味わうのよ。見てよ、私たちが付き合える人間と言ったら、同じ雑種の人間しかないのよ。中国人はだめ。なぜなら私たちは外国式の教育を受けているから。純粋な中国人と親しくすることはできないの。外国人もだめ！ここにいる外国人の誰が人種の観念を持っていない人があると言うのよ？彼自身を承知させても、彼らの社会が許さないわ。誰が東洋人なんかと付き合うの。もしそうになったら彼らの一生は終わりだわ。²⁸

以上見たように『第二炉香』の物語は、香港の植民地化と、多人種の混合地帯、「文明と野蛮」、「純粋と不純」の対立といった、人種・階級をその背景に有している。

ここで『第二炉香』の内枠物語の登場人物を紹介しておこう。

主人公であり華南大学の大学教授ロジャー・アルバート、そして彼と結婚することになっているスージー・ミッチェル、彼女の母親ミッチェル夫人、スージーの姉ミリセント、妹キャサリンは同じようにイギリス人である。彼らは、「中等以上のイギリス人の家庭では、その話題で持ちきりだよ」(p113) とい

う描写からも、中産階級以上であるという事ができる。また、ミッチェル夫人の家庭は、張愛玲によって幾分誇張されているといえるが、純潔を信条とした家庭であることから、ヴィクトリア朝女性の雰囲気をも分に有していることが読み取れる。²⁹

モリスン教授の後妻ドレンダは、ユダヤ人の血を引いたイギリス人、つまり混血児である。他には大学の学部生でインド人医学生モシンドラ。そして、一場面のみ（p92）に登場するインド人女性がいる。

2. 『第二炉香』のあらすじ

『第二炉香』は、外枠・内枠2重構造の物語となっている。内枠物語は、先にも述べたように語り手である「私」が、図書館でアイルランド人の女の子クレメンティから聞いた話である。彼女は、クレメンティから入れ子構造の内枠物語を聞いて、「それは決して卑猥な話しではなく、むしろ悲しい物語である事がわかった。人生とは往々にしてこのようであるのだ——不徹底」

（p89）、「雲の隙間から殺し合いを見たようなものである」（p89）と読者に告げる。このようにして彼女は沈香の香りの中から、読者に内枠物語を語るのである。

内枠物語のあらすじを簡単に紹介する。まず、主人公は華南大学で物理学を教えている、イギリス人のロジャー・アルバート40歳である。彼は15年前に香港に志を持ってやってきたものの、香港の環境によって仕事について当初と同じ授業を行っている。彼はスージーという、イギリス人女性と結婚することになっている。スージーはロジャーとの結婚をまじかに控えるのであるが、スージーの母親ミッチェル夫人は、娘の性教育を全く行っておらず、新聞さえも母親が目を通した後にしか、読む事ができない（p96）「純粹」な少女である。ロジャーは、スージーの姉ミリセントの結婚が、以前、相手の男性の「野獣のような態度」（p91）により、失敗に終わった事を知っている。そして、ロジャーはミリセントの結婚を気の毒に思っている。

ようやく結婚式をすませたロジャーとスージーは、初夜を迎えることになるが、「純粹」なスージーは、ロジャーの「変態心理」（p104）に恐れをなし、その晩に華南大学の学生宿舎へと逃げ込む（p101）。

スージーから、ロジャーの「変態心理」を耳にした、インド人医学生モシンドラと、華南大学の学生は、皆でロジャーの異常行動（実際は異常ではな

い)を、校長らに知らせる。周囲の人間達から、野獣扱い、変態扱いを受けるようになったロジャーは、ここで初めて、スージーの姉、ミリセントの結婚の失敗が、相手の男性の異常な性欲にあるのではなく、ミッチェル夫人の娘の性教育にあったのだと理解する。しかし、時はすでに遅く、周囲の環境に圧迫され始めた彼は、大学を辞職することになる。そして最後にロジャーは、夕食会でモリスン教授の混血の妻、ドレンダから、ミリセントの夫が就職先を探す事ができなくなり自殺した事を聞かされる。その後ロジャーは、一人帰宅し、自宅でガス自殺を計る。

内枠物語はここで終わり、外枠物語の「私」が、「沈香屑は燃え尽き、火が消え、灰は冷たくなった」(p125)と述べて、物語は閉じられる。

3. 文明と野蛮

本章では、まず『第二炉香』の主要な物語として描かれる内枠物語を元に、ロジャーの死の裏にいかに文化、人種の問題が関係しているのかを明らかにしてゆこうと思う。そしてその考察の後、外枠物語の「私」が語る「悲しさ」(p89)が、いかなる種類の「悲しさ」なのか、また「雲の隙間から目撃した殺し合い」(p89)とは何を意味するのかを、張愛玲の随筆も参照して考えてゆく。

3.1 内枠物語における、文明と野蛮

まず、主人公ロジャーである。彼はスージーと初夜を迎えるまでは、異常さを持たない、「普通のイギリス人」である。彼は自らを分析し、「自分が普通の人間でありたかった」(p114)と考えている。³⁰

彼(ロジャー—河尻注)は、イギリス人として、いかなる感情の発露にせよ、絶対的に必要なものを除いては、いつも無駄なものであると感じていた(p93)。³¹

彼は、多くの中産階級のイギリス人と同様、スージーとの悲劇があるまでは、イギリス人と混血児との結婚を厳しく非難している。以下に、同僚のモリスン教授と、以前天津で芸を売って生きていたユダヤ人混血児、ドレンダとの結婚に対するロジャーの態度を挙げてみよう。

モリスンは、ドレンダと結婚したために、華南大学で引き起された、一般

的な世論に不満であった。ロジャーの事件が起こる前に、モリスンの結婚も周囲の人間に聞き耳を立てられる、指折りの事件だったのである。そしてロジャーは自分でも、厳格にモリスンを批判していたのだ (p120)

以上のように、スージーとの事件があるまでは、主人公ロジャーにとって、イギリス人（文明人／純粹）と混血児（野蛮人／不純）との結婚は、不純であって許されないものであった。しかし、彼の「文明人」としての境遇は、スージーとの初夜の後に変化をはじめるとする。

結婚式の晩にロジャーの家を逃げ出したスージーは、学生とともに校長の元へ行き、ロジャーの処分を求める。校長は一旦彼女を家へ帰そうとするが、しかし、スージーの気持ちは収まらず、その足でモリスンの所へと向かう。事件のいきさつを聞いたモリスンは、彼自身、ロジャーの行動が、離婚にいたるものであると思っただけではない。しかし、彼はスージーに弁護士を雇う事を提案する。校長バークが、「彼（モリスン—河尻注）は彼女（スージー—河尻注）に弁護士を雇うことを承知した。この事件を騒がせようとしてね」（p113）と、述べていることから、モリスンが事件を騒がせようとした原因には、先に取り上げた彼と混血児の妻との結婚に対するロジャーの態度への恨みが存在すると考えられる。以下の描写を見てもそれは理解されるだろう。

ロジャーは自分でも、厳格にモリスンを批判していた。（事件発覚があつて）彼ら2人（ロジャーとモリスン—河尻注）の憎しみは、それによってさらに深まって行つたのである…そのため、現在のモリスンの復讐はさらに心地よいのだ (p120)。

友人である校長からも、自分の行動を完全には信じてもらえなかったロジャーは、大学を辞職する事を決意する。しかし、ロジャーは校長から上海や北方の大学は、キリスト教会が主催しており、不純な噂を立てられた人物（「野蛮」と考えられる人々）の再就職が難しい事を聞かされる。ここでロジャーは、はじめて自分の生きる環境（イギリス人中産階級社会）の愚かさ、その囲いの外（「非文明的社會」）にいることの、恐ろしさを知るのである。

…最も親しい友人でさえ、バーク（校長—河尻注）でさえ、彼は誤解を解く事ができないのである。その他の、中産階級以上の香港イギリス社会の人々にいたっては、彼は何を言うことができるだろう？ 彼らの中の男性は、ブリキの目覚まし時計のように、時間どおりに食事を取り、お茶を飲み、

トイレに行き、仕事をする。(中略) 女性、彼女たちは1日中絹糸を編み…(中略) 彼はこれらの人々にスージーの家の、家庭教育の欠陥を説明する事ができるであろうか? ロジャーは自分が普通の人間でありたかった。現在、環境が彼に迫っているのである。環境は彼を、大衆の囲いの外へと押しやったのだ。彼はやっと囲いの内面の愚かさを知った——愚かな残酷さを、… 囲いの外はどうして恐ろしくないであろうか。(p114)

ここでもういちど第2章に挙げた植民地の妻、メムサーヒブの役割を確認しておこう。彼女らは、「白人社会と現地人社会との境界線そのものであった」と考えられていた。³²

つまり、スージーとの事件によって「変態心理」を有した人物となったロジャーの立場は、イギリス人中産階級の「文明人」として「野蛮人」を観察する立場から、自らが「野蛮人」として、「文明人」から観察される立場への変化を余儀なくされたのだという事ができる。

次のような描写からも、ロジャーが以前の「文明人」から、「変態心理」を持った人物「野蛮人」として、周囲の人々から観察されるようになった事がわかる。以下はスージーが逃げ出した後に、周囲の人間がロジャーを見つめる視線である。

ある者は彼(ロジャー—河尻注)が、会わせる顔が無く、逃げたのだと言った。…またある者は、彼は湾仔³³へ行き、彼の欲望を満足させる女性の元へと行ったのだ、と言った…(p106)

彼女たち(白人女性—河尻注)は彼を無視し、彼を憎悪した。ただし同時に彼女らは、萎縮しながらも一切の犯罪人を好むのであった。残酷で、野蛮、そして原始的な男を。(p118) (傍点部筆者)

事件の後で大学を辞職する事となったロジャーは、長年、友人で同僚のモーフィスン夫妻とテニスに出かける。³⁴しかし、そこでも彼はモーフィスン夫人の視線によって、自分が「動物園の動物」(p119)のように、観察されている事を知り、疲れたと帰宅しようとする。しかし、彼の周囲の環境は、「野蛮人」となった彼を逃さない。以前は混血児であるのでその結婚に反対していたモリスンの妻ドレンダが、彼を夕食に誘うのである。

夕食に誘われたロジャーは、最初断ろうと考えるが、結局は出席することになる。そして夕食後、彼は同僚たちがインド独立の議論を始めると、次の

ような行動をとる。

食後、皆は扇風機を囲んで、どもりながら、顔や耳を赤くして熱心にインドの独立の問題を話しあった。すぐに「白人の植民地における声望」の問題に話しが及んだ。ロジャーはそそくさと歩いて行くと、ラジオのスイッチをつけた (p122)

ここでラジオのスイッチを付ける彼の心理状態とは、周囲の友人が「白人の声望」を議論するのに、今となっては、身分が反転して「野蛮人」になってしまった自らの境遇との間で、身動きがとれなくなって耳を塞ごうとするものであると言えよう。モリスンの妻ドレンダは、事件によって自分の境遇（「野蛮」／「不純」）と、境遇が近づいたロジャーを愛そうとするが、キャサリンの前夫フランクリンの自殺を聞き、ロジャーの「文明人」としてのアイデンティティは、彼を崩壊へと導いてゆく。

彼女（ドレンダ―河尻注）はわずかにしわがれた小声で言った……「あなたは（ロジャー―河尻注）自分を抑圧しすぎてはいけないの。とても危険よ。私、あなたにそう勧めるわ！」ただし、彼（ロジャー河尻注）がいつ自分を抑圧したというのだろうか？彼はドレンダを愛していないばかりでなく、彼女は彼に少しばかりの純粋な魅力さえも持っていないのである。彼は彼女のような美しさを好きではなかった。しかし、彼はどうして、自分が自分を抑圧していないとすることができるのだ？彼の無意識下の行いについて、彼よりも他の人の方が良く知っているようだ！これらの疑いに対する恐れと、恥ずかしさを経験した後、彼はどうして正常な性生活を送ることができるだろうか？ドレンダは言った。「抑制しすぎると危険なのよ！あなたフランクリン（ミリセントの前夫―河尻注）がどうやって死んだのか知っているの？（中略）彼は自殺したのよ！私が彼に会った時、天津で彼は仕事を探し出す事ができずに…」 p123

ロジャーは急いでモリスンの家を後にする。彼がいなくなり、ロジャーに友人たち（イギリス人）は、次のような言葉を浴びせ掛ける。

帰ったほうが良いさ。あいつ……飲み過ぎたら、何をしでかすかわからない。奥様方（メムサーヒブ―河尻注）を脅かすことにならない方が良いでしょう！（p124）

モリスンの家を飛び出したロジャーは、自らを律することができなくなり、

自宅に帰るとガス自殺をする。

3. 2 「私」の語り、張愛玲の文明観・人種観について

ここで外枠物語の「私」の語りについて考えてみることにしよう。外枠物語での、中国人の「私」は、アイルランド人の友人が「卑猥な話」であると感じていた内枠物語を、「悲しい物語」(p89)、「人生とは往々にしてこのようであるのだ——不徹底」(p89)、「雲の隙間から殺し合いを見たような気分であった」(p89)と感じていた。

本章第一節で見たように、「文明人」としてのアイデンティティを有していたロジャーは、スージーの事件により、以前「不純」であると非難していたモリスンから、復讐を受ける。そして、また彼は、以前の「文明人」として生きていた環境から圧迫を受けて殺される。

張愛玲は随筆、「自分の文章」(1944)の中で、次のような背景の元で、自身が作品を描いていると述べる。

この時代の中で、古い物は崩壊し、新しいものが育っていきます。ただ、時代の高潮がやってくる前に、物事がはっきりとするのは、ただ例外にすぎません。人々は日常生活の全てに不確かさを感じています。それは恐怖であるとも言えます。(中略) 私は虚偽と真実の強烈な対照を以って作品を描くのではなく、不揃いな対照を以って、現代人の虚偽の中にある真実、そして、はでやかさの中にある素朴を描こうとしています。³⁵

また張愛玲は、随筆「女性を語る」(1944)で、「実際、社会の進展とはとても不可思議なものなので、個人によってコントロールすることはできないし、そのなかに身を置く者には、全くそれが本当のことなのかがわかりません」、³⁶と述べている。張愛玲自身、他の小説や随筆においても外国人に言及する事は多々あるが、彼女がその中で西洋人や混血児、日本人、中国人を一方的な立場から非難することはない。³⁷

先にも挙げたように、外枠物語の「私」は内枠の物語を、人生の「悲しみ」「不徹底」と捉えていた。そしてまた、「私」は、スージーとの事件の後自身の立場が逆転したロジャーに、「彼はやっと囲いの内面(イギリス人中産階級—河尻注)の愚かさを知った」(p114)と語らせる。

以上のような事柄、そして張愛玲の創作に対する態度から考えるならば、

『第二炉香』における、外枠物語の「私」が見た内枠物語中の「悲しみ」「殺し合い」とは、混沌とした時代の香港における、人種間に存在する差別とその愚かさを意味するのではないだろうか。

論中で見たように、「文明と野蛮」「純粋と不純」といった不確かに存在する「境界」は、一瞬にして入れ替わる可能性があるのである。そのような「曖昧さ」「時代性」とを、張愛玲は外枠物語の「私」に、「悲しみ」として託して、発言させているといえるのである。³⁸

張愛玲の小説の中で、主要物語に中国人が登場しないのは、本作品『第二炉香』のみである。しかし、このように外枠物語において物語を聞き、読者に物語を提示する「私」は、中国人としての立場から、人種間に存在する「悲しみ」の物語を、短く燃え尽きる沈香の中より読者に提示しているのである。

5. おわりに

本稿では、張愛玲の中篇小説『第二炉香』を、当時の植民地香港の時代背景を元に分析した。分析の結果、内枠物語の主人公ロジャーが、スージーの事件を媒介として、「文明人」から「野蛮人」へと変容させられていることがわかった。また、ロジャーの物語を外側から語る、語り手の「私」が内枠物語を、「悲しい」物語として語っていることから、本作品を、張愛玲自身の随筆（「自分の文章」＜1944＞、「女性を語る」＜1944＞）と対照させ考察を行った。その結果、『第二炉香』の「私」が語る「悲しい」物語とは、混沌とした時代の香港における、人種間に存在する差別と、そこに不確かに存在する境界の「曖昧さ」「愚かさ」に対する、「悲しみ」であると結論付けた。

本稿では、『第二炉香』をもとに、張愛玲の文明観、人種観を考察した。以後の研究においても他テキストとの関係の中から、1940年代当時の張愛玲の思想についてさらなる考察を行いたい。

註

- 1 張子静『我的姊姊張愛玲』文匯出版社（2003）p112
- 2 『第二炉香』をセクシャリティの面から研究した論文には、林幸謙「双重意義的女性文本：張愛玲的女性論述」（『中国現代文学研究叢刊』＜1998、2期＞所収）、顧蕾『沈香屑 第二炉香』と『女家族』における母娘関係の比較（『多元文化第3号』名古屋大学国際言語文化研究科＜2003＞所収）など。
- 3 蔡源煌は「従後殖民主義的觀點看張愛玲」（楊澤編『閱讀張愛玲』麦田出版社

- <1999>所収)で、『第二香炉』における白色人種の問題に言及している。しかし蔡源煌論文では、物語中においていかに人種の問題が機能しているかについて具体的な考察が行われていない。また高全之は「閻魔興小鬼」(高全之『張愛玲學』一方出版社<2003>所収)において、『第二香炉』における人種の問題は、小説後半部の「インド独立に関する白人の植民地における声望の討論」(p92)の場面のみであると述べ、蔡源煌論文を批判している。
- 4 張愛玲は「『伝奇』再版自序」で、「もしも私が最もよく使う言葉が<荒涼>だとしたら、それは私の思想背景の中に、そのような漠然とした恐れがあるからでしょう」と、自身の作品に対する思想を述べている。(張愛玲『流言』中国文聯出版公司<1993>所収) p186。張愛玲は、原文では<蒼涼>という中国語を用いている。ここでは、日本語訳で同じ意味を表す<荒涼>という言葉を用いる。
 - 5 中園和仁『香港返還交渉』国際書院(1998)を参考。
 - 6 張愛玲「第二炉香」(張愛玲『第一炉香』皇冠出版社<1991>所収) p89。
 - 7 「沈香」(沈香木)は、広東から広西にかけての中国南西部と海南島で産出される中国を代表する御香。中島嶺雄『香港』時事通信社(1985) p86を参考。
 - 8 男女間の肉体関係。
 - 9 大村真紀『香港セピア物語』大和書房(1997) p154を参考。
 - 10 前掲、大村真紀『香港セピア物語』 p98
 - 11 前書p126
 - 12 前書p42
 - 13 葉倩璋「植民地主義と都市空間—台北における権力と都市形成」(竹内啓一編著『都市・空間・権力』大明堂<2001>所収) p37
 - 14 前書p40
 - 15 前掲、中島嶺雄『香港』 p98を参考。『第二炉香』で主人公ロジャーは、車でスージーの家に向かう際、高街を通り、山頂覽車駅の近くで車を止める。高街は中環に存在し、後ろ手にヴィクトリア・ピークが見える。山頂覽車駅は高街を東に上って行った所。よって、スージーの家はヴィクトリア・ピークに建てられている事がわかる。前掲、張愛玲『第二炉香』(1991) p91
 - 16 前掲、中島嶺雄『香港』 p119を参考。
 - 17 井野瀬久美恵『女たちの大英帝国』講談社現代新書(1998) p37
 - 18 イギリスは1760年に産業革命を起こす以前、羅針盤や火薬、印刷術を発明した中国に対し好意的イメージを有していた。しかし、19世紀前半のアヘン戦争の後、中国を「静止した不変の社会」と見る、侮蔑的態度に変化した。このようなヴィクトリア期のイギリス社会の、非西洋社会に対する態度を、東田は自国文明に対する過信と、他国への軽視を基礎とした「文明化の使命」であったと捉えている。東田雅博『大英帝国のアジアイメージ』ミネルヴァ書房(1996)を参考。
 - 19 サマセット・モーム、中野好夫訳『雨・赤毛』新潮文庫(1954) p10。マクフェイル夫人の夫は博士。彼らはイギリス人中産階級である。
 - 20 モームの短篇小説『雨』では、植民地エイピアで布教活動をし、野蛮人を文明

化しようとした宣教師デイヴィドソンが、下層階級のあばずれ女、ミス・トムソンを教化（文明化）しようと試みて失敗、自殺をする。なお『雨』は、1920年に『ミス・トムソン』の名前で発表された。

- 21 前掲、井野瀬久美恵『女たちの大英帝国』p40
- 22 前掲、井野瀬久美恵『女たちの大英帝国』p43。ロナルド・ハイアムは、『セクシュアリティの帝国』において、「規定を定めてメムサーヒブの役割を規制したのは男たちであり、メムサーヒブはそのための道具だった」と、述べている。ロナルド・ハイアム、本田毅彦訳『セクシュアリティの帝国』柏書房（1998）
- 23 前掲、井野瀬久美恵『女たちの大英帝国』p53～54を参考とした。
- 24 ジャン・モリス、飯島渉ほか訳『香港』講談社（1995）p130
- 25 ハリエット・サージェント、浅沼昭子訳『上海』新潮社（1996）p63
- 26 前掲、ジャン・モリス、飯島渉ほか訳『香港』p129
- 27 前書p126
- 28 前掲、張愛玲『第一炉香』p60、61
- 29 ヴィクトリア朝時代の女性は、家庭重視の「お上品さ」「女らしさ」が求められた。応接間から性的な話題は追放され、男女共通に読まれる出版物にも検閲の目が光らされた。このような状況は、娘たちの読む新聞を検閲する、『第二炉香』のミーチャー夫人の態度（p96）にも表れている。河村は、『イギリス近代フェミニズム運動の歴史像』において、「一般化できる十分な資料がないにせよ、当時の女性がセクシュアリティについて驚くべき無知の中に置かれていたことは間違いない。1920年代に産児調節運動家のマリー・ストープスに宛てて書かれた数々の手紙は、セクシュアリティや生殖についての極端な無知があらゆる社会的レベルにゆきわたっていたことを示している」と、述べている。バンクス夫妻、川村貞江訳『ヴィクトリア時代の女性たち』創文社（1982）p140、川村貞江『イギリス近代フェミニズム運動の歴史像』明石書店（2001）p252、を参考とした。
- 30 張愛玲は随筆「アパート生活の楽しみ」（1943）で、アパートに住む昆虫を「一般のイギリス人と同じように、冷淡で自給的である——イギリス人は、アジアの森林の中に住んでも、いつものとおり燕尾服を着て晚餐をとるのだ」（傍点部筆者）と述べている。張愛玲「公寓生活記趣」（張愛玲『流言』皇冠出版社＜1991＞所収）p30。また張愛玲は、1941年に雑誌『西書精華』に、アメリカ人女性マーガレット・ハルセイが大学教授の夫について行きイギリスで暮らした際、アメリカ人から見たイギリス人を風刺して描いた随筆、“With Malice toward Some”を、中国題「諧而謔」として摘訳している。張愛玲が訳した部分には、イギリス人の権威を重んじる態度などが、風刺的に描かれている。張愛玲「諧而謔」（『西書精華』第6期夏季号＜1941＞）。本随筆に対するさらに詳しい考察については、稿を改め言及したい。
- 31 1912年から2000年を生きたキャスリーン・マクロンは自伝の中で、第二次世界大戦時期の父親の思い出として次のように述べる。「父にすれば、男というものは、ましてや英国男児たるものは、絶対に感情をあらわにしないので

ある。」彼の父親は、1880年生まれであり、ロジャーとほぼ同年代であると言える。キャスリーン・マクロン、柳本正人訳、『大英帝国下ある英国紳士の生き方』草思社（2000）

- 32 前掲、井野瀬久美恵『女たちの大英帝国』p53～54
- 33 湾仔は歓楽街。前掲、中島嶺雄『香港』p204を参考
- 34 事件発覚後も、モーフィスン夫妻がロジャーをテニスに誘った理由は、「すでに何年も以前から続いていたことであり…彼らは今になっても彼（ロジャー＝河尻注）をいつもの通り、招くより他なかった」（p119）からである。
- 35 張愛玲「自己的文章」（張愛玲『流言』皇冠出版社＜1991＞所収）p19、20
- 36 張愛玲「談女性」（張愛玲『流言』皇冠出版社＜1991＞所収）p86。また同随筆で、張愛玲は、未来社会には、黒人が権力を握るべきだという考えも示しているp86
- 37 さらに詳しい張愛玲の人種観・文明観については稿を改めたい。
- 38 これまでにセクシュアリティの方面からの研究で、林幸謙、顧蕾ともに、『第二炉香』を分析し、張愛玲が「父権制を転覆させた」と述べている。以上について、本稿はセクシュアリティを中心とした分析ではないものの、これまでに考察したロジャーの転落の理由から見て、本稿の研究は「父権制を転覆させた」という両氏の見解に矛盾しないものであるといえる。前掲、林幸謙「双重意義的女性文本：張愛玲的女性論述」（『中国現代文学研究叢刊』＜1998、2期＞所収）、顧蕾『沈香屑 第二炉香』と『女家族』における母娘関係の比較（『多元文化第3号』名古屋大学国際言語文化研究科＜2003＞所収）